

第 145 回 列強のアフリカ分割①

1 列強のアフリカ進出のはじまり

- かつて「暗黒大陸」と呼ばれ、未知の地域であったアフリカでは、19 世紀初頭までにポルトガル・イギリス・フランスなどが沿岸に植民地を建設していた。
- また（ ）や（ ）の探検によって内陸部の事情が明らかになると、列強のアフリカ進出が本格化していった。

- （ ）国王の（ ）は、資源の豊富な（ ）を私有地として領有しようとした。
→他のヨーロッパ諸国はこれに反発した。
→1884 年、ドイツ帝国の宰相（ ）によって（ ）が開催され、「先に実効支配して通知した国が領有できる（先占権）」ことを確認した。
→ベルギーは国王の私有地として（ ）を建設し、植民地とした。



ベルギー国王レオポルド2世



ベルリン会議の風刺画

真ん中で「アフリカ」と書かれたケーキを切ろうとしているのが、ドイツ宰相ビスマルク。要するに、早い者勝ちということを決めたのである。



コンゴの黒人

レオポルド2世は、黒人にノルマを課して、達成できなければ手首を切り落とすなど、とんでもないことをやっていた。

2 イギリスのアフリカ進出

- イギリスは、19 世紀の時点ですでに（ ）への連絡通路として重要な、（ ）と（ ）を植民地としていた。

- イギリスは、インドの（ ）・エジプトの（ ）・ケープ植民地の（ ）を結ぼうとする（ ）を行った。
→その一貫として、アフリカでは北から南までを結ぶ（ ）を展開した。

- 1869 年以降、イギリスは（ ）への進出を続けていた。
→1881 年、ムハンマド=アフマドは、自らを（ ）であると宣言し、イギリスに対して武装蜂起した。
※これを（ ）という。
→イギリスは（ ）将軍を送ったが、マフディー軍に敗れてスーダンの重要拠点ハルツームを占領された。
→1898 年によりやく鎮圧し、1899 年にイギリスとエジプトの共同管理とした。



ムハンマド=アフマド

マフディーとは、「救世主」という意味である。彼自身はすぐに病没したが、反乱は長く続いた。



ゴードン将軍

中国での活躍から、本名をもじってチャイニーズ=ゴードンと呼ばれていた。その後はスーダン南部の総督として、アフリカに派遣されていた。



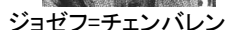
追いつめられるゴードン

英雄ゴードンの戦死は、イギリス国民の政府批判を巻き起こし、ついにはグラッドストーン内閣の退陣にまでつながった。

- ↓

- ・1910年、イギリスの自治領として、南アフリカ連邦が成立した。
→白人優位の人種隔離政策である（アパルトヘイト）を行った。
- ・またセシル＝ローズは、南アフリカの北方を征服して植民地とした。
→そこを自分の名前にちなんで（ナタール）と名付けた。

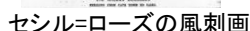
※現在の（ナタール）（南部）とザンビア（北部）を含む



グラッドストーン内閣で植民地相を務め、帝国主義政策を推進した。息子2人も有名な政治家である。



ブル人はアフリカーナーとも呼ばれる。軍事力で劣るブル人は、イギリスをゲリラ戦に誘い込み激しく抵抗した。イギリスは苦戦し、莫大な兵力と戦費を消費してしまった。



アフリカのナポレオンと呼ばれ、帝国主義政策を推進した。アパルトヘイト政策にも関与している。この風刺画は有名ですね。

